

# エマソンとカーライル

石 田 憲 次

カーライルとエマソンとは古くから、「チェルシーの聖者」、「コンコードの哲人」などと並び称せられて来た。理由は色々あると思はれるが、先づ第一にはその思想が相似てゐることである。カーライルはカルヴィニズムの最も代表的な宗派である長老教会が国教となつてゐるスコットランドに牧師となるべく教育されたのであるが、ヴォルテール、ギボンなどの書物を読んでから、牧師の職が自己の思想と両立しないことを発見して、その志を擲ち教師となつた。併しそれもほんのしばらくでやめてしまつた。その後しばらく、カーライルは自己の職業もなく、この世に於ける使命も定かでなく、彼の生涯の中の最も暗黒な幾年かを過したが、ゲーテをはじめ、ドイツの新文学、新哲学の影響を受けて、キリスト教ではないが、ヴォルテール、ギボンなどの懷疑哲学には反対な一種の理想主義の立場を発見し、それを彼の初期の論文や「衣服哲学」、「英雄崇拜論」などに表現したのである。エマソンはカルヴィニズムのいま一つの流派である組合教会が一種の神権政治を実現したニュー・イングランドに生れ、その組合教会の近代化された形ともいふべきユニテリアン教会の牧師となつたのであるが、彼も亦その進歩思想が教会の立場と両立せず、遂に聖餐を授ける、授けぬの問題で、教会の埒外におん出てしまつたのである。さうしてワーズワス、コールリッジ、カーライル、やがてはドイツのゲーテ、シェリング等の思想に接触し、彼も亦キリスト教でない彼一流の理想主義を唱へ出したのである。彼等は二人とも在来の月並なキリスト教から脱出した。そこに彼等の時代精神に一致した強みがあつた。これはエマソン



エマーソンとカーライル

二(八〇五)

ンがエッセーの中で言つてゐることであるが、キリスト教の牧師として職業的に説教するのでは、いくら公平に自由に議論するやうに見えても、その結論は見え透いてゐる。教会の教義以外には出ないのである。ところがカーライルやエマーソンに於ては、かかる嫌がなく、全く独自の立場からの言説が聞かれた。それが当時の社会が二人を特に重んじた理由なのである。カーライルの「英雄崇拜論」の言葉を借るならば、英雄は宇宙の“open secret”ともいふべきものを語る。その語る真理は同一であつても、その語られる“dialect”は各時代各地域によつて違ふ。カーライルやエマーソンはその時代その地域のダイアレクトで語る人であると、その当時の人々は思つたのである。他方に於て、彼等は甚だキリスト教的であつた。彼等はただこの世に処する道を教へたのではない。彼等の教は昔イエス・キリストがその当時の民衆に与へたと同じやうな平和と歓喜とを与へるものの如く説いた。そこに彼等特有のアクセントがあつた。マシュー・アーンホルドは「アメリカに於ける演説集」の中で、エマーソンの優れた詩句の感銘を述べてゐる。

“So nigh is grandeur to our dust,

So near is God to man,

When Duty whispers low, *Thou must,*

*The youth replies, I can.”*

カーライルも亦常に「義務の無限性」を強調して、「快樂を愛せずして神を愛せよ、これこそは凡ての矛盾が解決せられる永遠の肯定である」といふやうな彼此相通ずる言説をなしてゐるのである。カーライルはゲーテがヴォルテール以後の世に於て、なほ信念を以て生き、昔の聖賢の道を今日に於ても実行することが出来ることを教へたと言つてゐるが、カーライル・エマーソンに就てもほぼ同じことを言ふことが出来るのである。ベルジュームのマーテルリンクはフランス文学の外に英文学に親んだ人であるが、カーライル・エマーソンの二人を共にかやうな“sage”として取扱つてゐるのである。この点が大きな類似であり、二人の名前を對にならべられるやうにした大きな原因があると思ふ。



その他にいま一つ大きな原因がある。それは個人的なもので、二人が世にも美しい友情友誼によつて結ばれてゐたといふことである。カーライルは前にも言つたやうな、精神的彷徨の時代を経過して、自己の使命を自覚するに至つたが、その使命に従つて生活せむが為に、彼の新妻の財産として彼のものとなつたクレイデンバトックの幽棲に引きこもつて、それこそ “plain living and high thinking” の日々を送り、ただ「エディンバラ評論」などにドイツ文学紹介の論文を寄稿して収入を足してゐたのである。エマーソンはこれをニュー・イングランドで読んで甚だ深く共鳴し、カーライルの文名がまだ全く現れない時から、彼に着目してゐたのである。それでエマーソンは最初の愛妻を喪ひ、牧師の職を離れ、傷いた身と心とを養ふ為に、ヨーロッパ旅行を試みた時、彼がウォールター・サヴェジ・ランダーやコールリッジ、ワーヅワスにも増して是非会つて見たいと思つた人はカーライルであつた。カーライルの住んでゐたクレイデンバトックといふのは、全くの山の中の一軒家といつてもよい。私が大正の末年に訪れた時も非常な不便を経験したのであるから、十九世紀の初に於てはなほ更さうであつたに違ひない。それなのにエマーソンは態々カーライルを訪ねたのである。カーライル夫妻の喜び方は自ら想ひやられるのである。それは一八三三年八月の末つ方の日曜の午後。カーライル夫妻がただ二人で晚餐をとつてゐた時に、エマーソンが突然天から降つたやうに彼等を訪れ、一晩泊つて、翌日はもう立去つたのであるが、それまでに二人はその近辺の山々を歩き廻つて、色々の問題について語りあつた。かくして結ばれた友誼はただ精神上的の同感共鳴にとどまらず、實際的にもいくつかの実を結んだのであつた。カーライルは前にも言つたやうに、彼の文学的生涯の初に於ては主としてドイツ文学紹介の論文を書いてゐた。併し彼はかやうな論文ではまだ十分に自己を表現することが出来なかつた。そこで彼の思想や体験をもつと全体的に、もつと直接的に表現しやうといふ意図を以て「衣服哲学」を著した。それをロンドンにもつて出て出版を交渉したけれども何処でも引受けてくれない。ただ *Fraser's Magazine* といふのが、それを小切つて掲載することを承諾したのである。そのフレイザーズに出たものを一緒にまとめて一冊の書物として出版したのはエマーソンであつて、英国版が出たのはその後のことである。



エマーソンとカーライル

四 (八〇七)

る。それのみならず、エマーソンが送つてよこしたアメリカ版「衣服哲学」の印税は、カーライル夫妻の窮迫した生活にとつて如何にありがたいものであるか知れなかつたのである。カーライルの「フランス革命史」が出た時分も、そのアメリカ版の世話はエマーソンがした。カーライルは英国に於て自己の生活の前途が暗澹としてゐる時分には、屢々アメリカ渡航を夢みたが、遂に大西洋を横切るには至らなかつた。併しその代りに、エマーソンの方はその後も二度イギリスを訪問したが、その度毎にカーライルに会つて旧誼を暖めた。それのみならず、今日 C. E. Norton 編の *Correspondence of Carlyle and Emerson 2 vols.* (全体で百七十三通の手紙を収録してゐる) に集められてゐるやうな、書簡の往復が二人の間にあつて、雙方に影響を与へたのである。かういふ精神上の共鳴同感の上に立脚した友誼といふものは案外に少いのであつて、二人の名前の一方が他方を聯想させるやうになつたことは洵に故なしとしないのである。かやうにして二人は非常に相似た点をもつてゐるのであるが、それにも拘らず、非常に違つてゐるのである。否な非常に多くの点に於て全くコントラストを為すと言つてもよい。このコントラストをよく研究して見れば、両者の国民性、両国の社会事情といふやうなものにも關係して、極めて示唆する処が多いのである。先づ、カーライルに就いて言はむに、彼は單なる貴族主義者でなく人民の友であることは明かである。カーライルは彼自身民衆の出であつた。彼の父は石工であり、彼は子供の時跣足でもつて駈け歩いたものである。彼は後には學者として著れたけれども、學問のあることが特別にえらいことであるとは考へなかつた。彼は何処かに書いてゐるやうに、彼の精神的の仕事が御父さんの建てた家や橋のやうに誤魔化しのない、揺るぎのないものであることを只管念願した。百姓となつた彼の弟に与へた手紙にも、弟の仕事と彼の仕事との間に本質的の相違がないことを説いたものがある。それで彼は生涯の初に於ては貴族富豪よりも寧ろ貧民労働者の味方であつた。「衣服哲学」の中のトイフェルスドレックは「貧民の為に」(zur Sache der Armen) 杯を挙げて居り、またその中には Zählarm 伯爵の墓碑銘といふ、無為徒食の生活を送つてゐる貴族に対する痛烈極まる諷刺がある。「フランス革命史」や、「チャーティズム」や、「過去と現在」が専ら貧民の為の同情から書か



れたことは勿論である。それにも拘らず、彼は民主主義者ではないと言ふことが出来る。といふのは、彼は結局に於て民衆の自治能力を信ぜず、国家の権力——英雄の政治によつて、民衆の幸福を将来せむとしたからである。それには社会的原因と個人的原因とがあると思ふ。カーライルの直面したヴィクトリア朝初期をとつて考へて見ると、労働不安があつて労働者は暴動を起し勝ちであつた。併しそれに自由を与へて社会の治安が維持されやうなどとは一寸考へられなかつた。自由進歩主義者であり、一八三二年の選挙法改正の爲には重要な役割を演じたマコーレイの如きも、“manhood suffrage” は英国の爲に不祥事を惹起し、どんな事態が起るかも知れぬと言つて不賛成を唱へてゐるのである。ところがその当時政権を握つてゐたのは、昔からの地主貴族と、一八三二年の選挙法改正の結果として新に政権を獲得した中流階級とである。然るに地主貴族はまだ穀物条例などを存続させて私利を図り、中流階級は拝金思想に囚はれてこれまた私利の追求に余念ない。この時労働者の爲をはかるやうな政治を施す爲には、真に天下国家の事を憂へるやうな偉人英雄が権力を握つて善政を施くといふ方面より一寸考へられなかつたのである。それは一八三二年の選挙法改正まで、自由、自由といふことが唱へられて中流階級が政権を得、さうしてその結果が満足でない時、更に自由を拡張するといふ方面に救済があるとは先づ考へられず、その弊害を矯める方向——自由に対する秩序の方向に救済が考へられるのは当然だからである。この時代の人々の考へが国家干渉といふ方向に期せずして一致したことは尤もだと思ふ。カーライルをはじめデイズレー、ディケンズ、キングスレーが皆な同じ方向に物を考へてゐるのである。マシユー・アーノルドやラスキンはヴィクトリア朝中期に同じ方向に考へてゐるが、その時代は労働者が初期ほどには暴動などせず、その教育も前よりは進んで來てゐるのであるから、前代に於けるカーライルの考へ方の妥当性を証明することともなると思ふ。

かやうにカーライルの非民主主義的、貴族主義的な傾向は当時の歴史的事情にもよるが、またカーライルの性格にもよると思ふ。W・C・ブラウネルはカーライルをば、“explosive personality” の所有者となし、アーヴィング・バビ



エマーソンとカーライル

六 (八〇九)

ットなどもそれに賛意を表したが、それはカーライルの性格の最も大きな特色である。カーライルは「衣服哲学」の中の「永遠の肯定」の章で、人間は自己を棄てなければ駄目であると言つてゐる。これはカーライルの本当の悟であり、カーライルがさういふ真理を体得したことに間違ひはないと思ふが、併し人間が悟の前と後でまるきり変わるものでないといふことも本当である。カーライルが我の強い人であつて、自己を他人の並に考へて他人に頼ることが出来ず、短気で氣むづかしかつたことは諸種の事実から確証出来ることである。有名な話であるが彼の部屋は物音が聞えないやうに出来てゐた。処がデモクラシーなるものは自己と共に他人を認め、自分を全体の中のただ一人としか考へないといふ主義である。これは我の強い人には不向な主義である。デモクラシーは他人を尊重するから強制を避ける。強制を避けやうとすれば説得——persuasion——を重んじなければならぬ。説得をする為には諄々として倦まざることが必要である。最も氣が長くなければならない。然るにカーライルの態度はまるきり逆である。カーライルは“Speech is silver, silence is gold.”などと言つて沈黙を讃し、能弁を嫌ふ。彼の英雄は皆しんねりむつりで、その痼癪が爆発すると疾風迅雷耳を掩ふに暇がないといふやうな行動に出る人が多い。マホメットでも、クロムウェルでも、ノックスでもさういふタイプの人である。これはデモクラシーに反対の性格である。

氣の短い人に一番向いた政治は力の政治である。専制政治である。カーライルの力の讃美は早くから現はれてゐる。マホメットが劍かコーランかと言つて、武力に訴へたのを是認してゐるのである。「過去と現在」では、“Right is Might.” であるとも唱へたが、同時に “Might is Right.” であるといふ面も高調し、専制的であつたノルマンの諸王を是認した。カーライルのこの専制政治の是認が最も極端に及ばされてゐる例は、Governor Eyre の事件に対して執つた彼の態度である。Governor Eyre は一八六四年にジャマイカの太守となつたが、間もなく黒奴の叛乱が勃発した。彼は戒嚴令を布いて叛乱を鎮圧し、ウィリアム・ゴードンといふ黒人その他六百人の者に対して叛乱罪を適用して死刑を宣告し、問題を惹起したのであるが、カーライル、テニソン、ラスキン、キングスレーは太守の態度を支持し、



J・S・ミル、ハックスレー、スペンサー等は之に反対したのである。カーライルの黒人に対する態度は“The Nigger Question”といふ彼の論文に明かであるが、ニッガーなどといふものはまるきり一人前の人間とは認めぬやうな口吻である。

カーライルは以上のやうに、デモクラシーといふ点から見ると、甚だ遺憾の点の多い人であるが、エマーソンはこれにひきかへ、甚だデモクラティックであると言へる。併し、それはエマーソンがカーライルより頭がよいとか、品性が立派であるとかいふことよりも、寧ろ合衆国の国情に帰すべき点が多いのだと思ふ。デモクラシーと治安とが一緒に問題にされ、治安の為にデモクラシーの制限の必要が説かれるのは、一つの閉せられたる社会なればこそである。十九世紀のアメリカのやうに、フランティアといふものがあつて、その方に始終安全瓣が開かれてゐる処では、自由を制限する必要はない。事実、フランティア地方に於ては、極度の自由、殆んど無政府の状態が存在してゐたのである。それであるからアメリカに於てデモクラシーを是認し、その前途を樂觀するといふことは寧ろ当然だと思はれるのである。エマーソンより少し後に出たウォールト・ホイットマンのデモクラシーの謳歌といふやうなものが、十九世紀後半の英国に於て考へられるかと自ら問ふて見れば、エマーソンの民主主義の背景にあるものが分ると思ふ。

次にエマーソンの性格であるが、エマーソンはアイディアリスト、ミステイクであると共にリアリスト、ヤンキーであつて、一般に平衡を得た人である。それで未来に対して希望を懷くと共に、現実の動かし難き力をも決して軽くは見なかつた。エマーソンの生きた十九世紀前半は、改革の空氣がアメリカを普く支配し、大は国家社会の機構から小は衣服食物に至るまで、改革一新しやうとの試みが相ついで現れたのである。ローウェルのソーロー論の言葉を借れば、「新しき村が現出し、其処では凡てのものがコンモンとなつたが、ただ例外なのはコンモン・センスであり、凡ての人が直ちに凡てのものを改革しやうとしたが、自己を改革しやうとするものはなかつた」といふ有様であつた。エマーソンの周囲でも Fruitlands とか Brook Farm とかの試みがなされたのに、エマーソンは頭の平静を失はず、それ等に



エマーソンとカーライル

八(八一)

加担しなかつた。併しそれにも拘らず彼は権威とか伝統とかの味方であるといふよりも、常に進歩の味方であつた。これは彼の“Man the Reformer”とか“New England Reformers”といふやうな論文が語つてゐる。アーヴィング・バビットはエマーソンは“modest”であつたが、“humble”でなかつたと言つてゐる。モデストといふのは人に対するもので、ハンブルといふのは神といふやうな最高の意志に対するものである。エマーソンの信ずる神は超越の神といふよりも内在の神であつたから、彼に *humility* が乏しかつたといふことが言はれたのであるが、エマーソンは少くともモデストであつた。モデストであるといふことは市民の徳であつて、他人と調和してよくやつて行ける。彼はその点デモクラティックなのである。カーライルは演説嫌ひであつた。「フランス革命史」執筆当時、彼の赤貧を見かねた友人等は彼の為に彼の講演会を開く計画をしたところ、彼はその求めに應じて「英雄崇拜論」など前後四回の講演をなしたが、前にも後にもただそれだけで、エディンバラ大学総長就任の演説が例外といへば例外であるに過ぎない。これにひきかへエマーソンは講演を重ねる収入の道としてゐたので、その為には随分遠く西部地方へまで足を延してゐた。これもエマーソンの性格が遙かに *peaceable* で *democratic* であつたことを証するに足ると思はれる。カーライルは黒人の人格を殆んど認めなかつたこと前述の如くであるが、エマーソンは黒人の同情者であり、奴隷廃止論者であつた。尤もこの点でも彼は穩健論者、漸進主義者であり、*Essays First Series* の出た一八四一年頃には既にウィリアム・ハリソンやホイットィア等の *Abolitionists* の運動が開始されてゐたが、それが為に自分の内心の平衡を破ることを肯ぜず、静かに自分の道を歩み続けてゐた。“Self-Reliance”の中で、「若し怒りっぽい熱狂家が奴隷廃止といふ博愛論を提げて」やつて来たなら、「お前の無情無慈悲の野心をば、千哩遠方の黒人に対するこの信じ難い温情を以て誤魔化すな」と言つてやれと言つてゐるが如きはその証左である。併し、一八五〇年にダニエル・ウェブスターが所謂“Seventh of March Speech”に於て、南部諸州と妥協し、“Fugitive Slave Laws”(自由なる北部諸州に逃亡して来た奴隷をもとの雇主に引渡す法律)などを是認するに至ると、彼はウェブスターを支持せず、普通の人と違つて、年



が寄つてから革新的になり、奴隷解放運動の爲の演説をしたり詩を作つたりしたことは、彼の全集を繙く者の容易に認め得ることである。デモクラシーの本質が前にも述べたやうに、凡ての人間の人格の尊重にありとすれば、早く黒人の権利を尊重すべきことを説いたエマーソンは立派なデモクラットであつたと言はねばならぬ。

次には文化の問題に関する両者の態度を比較対照して見たい。この点でも両者の相違は、アメリカ、イギリスといふ環境の相違と、二人の氣質の相違との両方に帰することが出来ると思ふ。ウォールト・ホイットマンはエマーソンの影響を受けた、謂はばその弟子のやうな人であるが、彼はその *Democratic Vistas* といふ論文に於て、それまでのヨーロッパの文学を “feudal literature” と名づけ、それに対して真の、デモクラティックな文学はアメリカに生れなければならぬとしてゐるのである。さうしてホイットマンの詩集 *Leaves of Grass* は全体に互つて新しき試みが今やアメリカに於てなされてゐるといふ意識に支配されてゐる。ゲーテはエマーソンに対しては先生であるが、彼は「合衆国に寄す」といふ詩に於て歌つてゐる。「アメリカ、お前は古い我々の大陸よりも仕合だ。崩れ落ちた古城とか巉巖とかをもつてゐないから。お前は現在役にも立たぬ追憶とか無用な争ひとかで内心煩はされることがない。現在を旨く利用せよ。さうしてお前の子供達が詩を作る時、幸に騎士だとか盗賊だとか幽霊だとかの話に手をつけないやうに」

Amerika, du hast es besser

Als unser Kontinent, das alte,

Hast keine verfallene Schlösser

Und keine Basalte.

Dich stört nicht im Innern

Zu lebendiger Zeit

Unnützes Erinnern



エマーソンとカーライル

一〇（八一三）

Und vergeblicher Streit.

Benutzt die Gegenwart mit Glück!

Und wenn nun eure Kinder dichten,

Bewahre sie gut Geschick

Vor Ritter-, Räuber-, und Gespenstergeschichten!

ウォールト・ホイットマンの言つてゐることは、ゲーテの忠告に従つたものとも言ふことが出来るが（ホイットマンがゲーテの詩を読んだとは考へられないが、精神に於ては）、エマーソンの *The American Scholar* や “History,”

“Self-Reliance” の如きも亦、皆新規時直しに出発する意識から生れたものである。

此処にエマーソンの樂觀が生れる。かやうに伝統の意識より自由なるエマーソンは不変の人性に根ざし、永遠の現在に立脚し、普遍的な理性に照らして行動しやうと努める。これ彼がギリシアやローマの古典文学、古典哲学に共鳴し得る所以である。エマーソンが “History” の中で言つてゐるやうに、ギリシアは人類の青年期のやうなものであるが、エマーソンも亦今アメリカの青年期にある故にギリシアの文物に親近性を感じ得たのである。かやうにしてエマーソンが歴史の拘束を感じることがないことは、彼をして世界の文化を特有な歴史から切離して、自由にテイレタント的に選択折衷することを得しめた。それはまた文化の各部門に対しても比較的自由公平な立場をとらしめた。エマーソンの知識は幾分浅薄で、“amateurish” であるといふ嫌ひは免れないが、文学と縁遠い科学——天文学、物理学、化学、生物学、地理探険といふやうな題目に殆ど “encyclopaedic” な興味をもたしめた。それに彼の天稟がこの傾向を助長した。エマーソンは熱情の人ではなかつた。彼は屢々自分の血が冷いことを問題としてゐる。それほど彼は感情よりも理智の人であつた。さうして血の冷い人に自然なやうに、よほど平衡を得た人であつた。随つて彼の物の見方は理性的で



あつた。彼は熱よりも光の人であつたのである。かういふと、エマーソンの文章に論理が乏しい故を以てエマーソンを理智的だと言ふことに反対を唱へる人があるかも知れない。J・S・ミルのやうに解剖や分析を主とし、論難や弁護に没頭してゐる人の文章と比較すると、エマーソンのエッセーは推理のプロセスを欠いた結論断案の数珠つなぎといふ感じがしないでもない。併しそれはエマーソンの直感を披瀝したことの結果であつて、それが矢張り理智の産物であることの眞実を否定するものではない。エマーソンが理智に重きを置いてゐることは、彼の論文を少し心して読めばすぐ分ること、彼にあつては常に *intellect* が優位をしめてゐるのである。彼の全集の中の一巻が *Natural History of Intellect* と題せられてゐるといふ一事によつても、彼の問題への *approach* が理智的であることは分らう。エマーソンのゲーテに対する関心と尊敬とはカーライルの刺激に負ふところが多かつたであらうと思はれる。*Representative Men* の中のゲーテ論は、ゲーテに対し批判的であつて、決して崇拜者追隨者の立場から書かれたものではない。之に反し、カーライルのゲーテ紹介の文章はゲーテ崇拜者私淑者の立場から書かれたものである。併しカーライルとエマーソンと、何れがよりゲーテ的であるかといふと、エマーソンがよりゲーテ的であると言ふことが出来る。それは何故か。中年以後のゲーテは古典主義者、理智主義者で、幾分デイルタント的であると言はれる迄に、全面的の教養を重んじ、科学に興味をもつた。その何れの点でも、エマーソンはカーライルよりもゲーテにより多く似てゐるのである。

カーライルの文化に対する態度は、環境的にも天稟的にもエマーソンに反してゐる。H・G・ウェルズは *Future of America* と題する著書の中で、ヨーロッパの社会からアメリカの社会に移つた時の印象を、色彩と明暗とに富む雲霧の中から白日の光の下へ出て来たやうだと譬へてゐるが、イギリスの社会はヨーロッパの中でも、封建的と近代적とが一番多く共存してゐた処である。G・K・チェスタートンは *Victorian Age in Literature* の中で、ヴィクトリア朝英国の特色は、フランス革命のやうな革命が英国に於て起らなかつたことであり、即ち貴族と中流階級とが妥協して共存したといふことであると言つた。ウェルズは、ヴィクトリア朝の終り方に貴族の力がなほ如何に強かつたかを *Tono*



エマーソンとカーライル

一二 (八一五)

*Bungay* の中の所謂 *Bladesover system* なるものに現してゐるのである。否な、エマーソン自身が、*English Traits* の中でヴィクトリア朝中期の実情を描き出してゐるのである。カーライルが歴史を重視するのは当然である。英国に於て歴史を無視するといふことは、全く現実と遊離することではしかなない。

マコーレイの如きは、ヴィクトリア朝の英国を謳歌し、更にそれが黄金世界を約束するかのやうに想像したのであるが、それは余りにも多く低俗醜惡なるものを見せつけたのである。機械文明・物質文明の發達、黄金崇拜思想の普及、弱肉強食的自由競争の激化、自然の破壊冒瀆等々が人々の感性を傷けずにはゐなかつたのである。ゴールドスミスやコベットが昔の *Merry England* に憧憬の眼を向けた如く、ニューマンが中世に、初代キリスト教会に復歸せむことを希つた如くに、カーライルも亦過去に理想を求めざるを得なかつたのである。歴史を重んずる理想主義者が現在に満足せざる時、その理想が過去によつて養はれたものである限り、過去を慕ふに至ることは極めて自然である。

歴史を重んずることは、やがて特殊を重んずることである。一見極めて変則で理窟にあはぬやうに思はれるものも、これを歴史的に見れば、それは一々今日あるがやうな形で存在すべき理由をもつてゐることが分るのである。かやうにして、歴史を重んずる人は縦に深さを増すことは出来るが、横に広さを拡げることはむづかしくなる。歴史の違ふ文化を気軽に移植するなどといふことは、不真面目な浮氣の沙汰としか考へられないのである。英国の歴史を重んずる者がその傾向を徹底させる時、北欧民族の特性といふやうなものに到りつくのは、自然の歸結で、それがカーライルのとつた傾向でもあつた。カーライルは北欧的なものを何よりも重しとし、ギリシア、ローマの古典などいふものを輕視するに至つたのである。それは「英雄崇拜論」の第一講「神としての英雄」の章に最もよく現れてゐる。彼はギリシア人をフランス人に似て小器用な人種のやうに言ひなして重んぜず、それに反して、北欧人の宗教が *rude strength* と *sincerity* とをもつた “*Consecration of Valour*” であることを礼讃してゐるのである。

かういふ傾向はカーライルの性質にも合つてゐた。ゲーテはカーライルを予測すべからざる未来をもつ道德力である



(Eckermann, Mittwoch den 25. Juli 1827) と言つたが、カーライルに於て我等が先づ感ずることはその力である。カーライルは情意の人であり品性の人であつて、理智の人ではない。ゲーテや、また或る程度に於てエマーソンが Olympian であるのに、カーライルはもつと原始的な Titan である。彼の生涯を読んで見ても、光より熱を多くもち、自らの激情になやんだ人であることが分る。彼の生涯には何処か暗い、照明せられざる点がある。彼はベンタミズムを忌み嫌ひ、十八世紀を呪ひ、経済学を dismal science と嘲り、同情して理解するよりも、反撥するものをより多くもつてゐたやうに見える。前程言つたやうに、黒奴を馬鹿にしたばかりでなく、英国の民衆をも馬鹿にし、 Latter-Day Pamphlets では、"Twenty-seven millions mostly fools." などの激語を吐いた。一体 intellectual な労働、creative な仕事は快樂を伴ふべきものである。他人から課せられた仕事でなく、自分が進んで自ら課する仕事だからである。ニヒューマンは Apologia pro Vita Sua を書く時、或る場合は二十二時間も書きつづけ、思ひ出の悲しさに歎歎することもしばしばだつたと言はれるが、その仕事が彼にとつて快樂であつたことは疑ふべくもない。然るにカーライルは彼の著述の仕事の苦痛に呻くことが多いのである。その一番有名な場合は「フレデリック大王伝」であるが、その他にも喜びを伴つたとは思はれず、全く投げやりの書きなぐりかと思はれる文章が沢山ある。たとへば「過去と現在」や Latter-Day Pamphlets の或る部分の如きがそれである。カーライルはその妻ジェーン・ウェルシを喪ふと、痛恨やる方なく、彼女をたたへると共に自ら責めさいなむやうな追憶の文章を認めた。それで J・A・フルードなどは、カーライルの夫人に対する同情が足らず、極端に言へば、夫人を自己の功名心——或は彼の尊き使命の為に、犠牲として顧みなかつたことに対する悔恨が彼を苦めたとするのである。予言者は娶らぬがよい、といふのがフルードの結論である。それに対しては異論も勿論あるが、かやうに自己を苦めて呻きなやむ人が、マシュー・アーノルドの理想とするやうな "sweetness and light" と縁遠い人であることは否むことが出来ない。

以上二つの点に於て、私はカーライルよりも寧ろエマーソンが優れてゐることを認めたのであるが、それでは凡てに



エマーソンとカーライル

一四 (八一七)

於て、エマーソンがカーライルに優つてゐたと見るべきであらうか。私はさうは考へない。以上の如きカーライルの欠点がやがて即ち彼の長所だと見る事が出来ると思ふのである。カーライルが引用した有名な聖書の文句に、*“Woe to them that are at ease in Zion.”* (身を安くしてシオンに居る者は禍なるかな) といふのがある。彼は上にも述べたる如く、遂にシオンにありて身を安くすることが出来なかつたのである。Olympian serenity には遂に到達することが出来なかつたのである。彼はそれが為には、彼の身内と身外とにある惡に苦みすぎてゐたのである。併し、それだけに彼は惡に就て極めて深刻なる意識をもつてゐた。それで凡ての生半可な、皮相的な善が彼には満足を与へなかつた。エマーソンとの往復書簡に於て、彼が始終エマーソンに慊らずとしてゐることは、エマーソンが兎角現實と特殊とを離れて、普遍と抽象とで樂觀的言辭を弄してゐることであつた。エマーソンは確かに氣質的にも樂觀的である。ウィリアム・ジェームズは「宗教的經驗の種々相」の第四及び第五講、*“The Religion of Healthy Mindedness”* に於て、生れながらにして善良で幸福で、再生 (regeneration) を必要としない所謂 *“once-born”* の樂觀主義者として、エマーソンやシオードア・パークーや、ウォールト・ホイットマンなどを挙げてゐる。併しエマーソンの余りに手放しの、安易な、人間性に対する樂觀が彼の欠点弱点であることは争へない。エマーソンは *“Self-Reliance”*, *“Spiritual Laws”* などで自分自身の本性に従ふことが最高の倫理であるやうに述べてゐるが、若しそれが本当なれば、オヴィッドが「我はよきことを見且つよしとすれども惡に従ふ」 (*Video meliora proboque sed deteriora sequor.*) と言ひ、使徒パウロが「我はわが中、すなはち我が肉のうちに善の宿らぬを知る。善を欲すること我にあれど、之を行ふことなればなり。わが欲する所の善は之をなさず、反つて欲せぬ所の惡は之をなすなり」と歎いたことはどうなるのであるか。エマーソンの周囲の transcendentalists の中には随分常識の点の如何はしいやうな人間が交つてゐたことは周知の事實である。この中にあつて、独り冷かな觀察の眼を見張つてゐたホーソーンはエマーソンの強い酒を頭の弱い人間が飲むとすぐ酔つてしまふといふ意味のことを *Mosses from the Old Manse* の中で言つてゐる。アメリカに安価な肯定論、



樂觀主義の行はれてゐることの何等かの責任はエマーソンに在りと、P・E・モアは“*The Influence of Emerson*”といふ論文で言つてゐる。その点になると、カーライルはいつも人間のことがさうたやすく解決のつくものでないといふ、意地悪いやうだが本当の意見を述べてゐる。M. Roux といふ人が、フランス革命はキリスト教の精神を實行しやうとする試みであつたと、その著 *Histoire Parlementaire* の中で述べてゐることに対する彼の批評の如きはその代表的なるものである。彼は言ふ、「凡ての人が悔い改め、各自が自己の悪しき生活を改めることによつて四海同胞を實現しやうとする福音書の精神と、各自が全世界の悪しき生活を改め、憲法を制定して救はれやうとするジャン・ジャックの精神とは全く天地霄壤いなそれ以上違つたものである」と (*History of the French Revolution*, Bk. V. ch. I.)。またP・E・モアは真偽はたしかでないが言つて次のやうな逸話を伝へてゐる。エマーソンがカーライルを訪れた時、カーライルはエマーソンの樂觀論をなほさうと思つて、ロンドンのイースト・エンドの貧民窟に案内し、悲惨な光景をこれでもか、これでもかといふやうに次々に見せ、“*And do you believe in the devil [= devil], noo [= now]?*”と繰返したが、エマーソンはただ静に頭を振るのみだつたと言ふのである。カーライルが呻きながら、時には人を罵りながら多年を費して著した *Letters and Speeches of Oliver Cromwell* や *History of Friedrich II of Prussia called Frederick the Great* の如きは、カーライルが自らの悪を浄化せむが為の必死の努力の表れであるといふ風に私は見る。さうしてそれに比べると、エマーソンのエッセイ集は如何にも手薄で、テーブル・トークの集のやうなものであるやうな印象をさへ受ける。私は今から約二十年前アメリカの *Bookman* の誌上で、G. R. Elliott が、「知的にはカーライルはエマーソンの敵でなく、エマーソンのヘレニズムがその後有力となつたが、若し反対であつたなら、我が文学はもつと力強いものであつたらう。エマーソンは地方的な反動から *Puritan will* の意味を曖昧ならしめたのである」と言つたことが今日まで深く頭に残つてゐるのである。ただ一言エマーソンの為に弁ずれば、人は兎角自分自身を以て他人を推すものである。アーヴィング・バビットはハーヴァードのエリオット総長が自らはピューリタンの伝統の最善



エマーソンとカーライル

一六 (八一九)

なるものを身につけ、非常に立派なしつかりした品性をもつてゐた為、凡ての人も亦エリオット総長であるやうなつもりで、“training for service and power”を合言葉とするやうな humanitarian な新教育をアメリカ教育界に導入して、バビットの考へによれば害悪を流したといふのであるが、エマーソンに就ても同様な事が言はれるのではないか。エマーソンは O・W・ホームズの所謂 ニュー・イングランド・ブラーミンの血を受けて、ピューリタニズムの最もよき伝統を身につけたばかりでなく、彼自ら非常にバランスのとれた性格の持主であつたが、それは決して万人に望めないのに、他人も亦彼のやうなつもりで、樂觀論を唱へたのではあるまいか。我々エマーソンならざる者は、彼の樂觀論に對しては、多少眉に唾をつけて見る必要があるのではなからうか。